



死者の時

他一編

井上光晴

「旺文社文庫」刊行のことば

いかなる時代においても、書物は人間の最大の喜びであり、最高の救いである。若い日読んだ書物は、人間の生涯にわたって影響をあたえ、第二の天性となり、人格となるであろう。

かかる観点から旺文社は、若き世代のための出版社としての使命感にたつて、ここに旺文社文庫を刊行する。内容は、洋の東西にわたり、時代の古今をつらぬき、文学・科学・伝記・随筆・思想、万般におよび、いやすくも知識人たらしとする者が、生涯の教養の基盤として、若い日一読すべき価値のあるものを可及的に多く刊行せんとするものである。

読むに価値あるものを、でき得るだけ楽しく、消化しやすく、読みやすく提供することは出版社の義務である。出版道義を強く信奉せんとしているわが社は、この目的にひたむきに献身するものである。あえてわが社の志を理解されご支援あらんことを。

旺文社社長

赤松 久夫

〔編集顧問〕 小田切進 茅 誠司 木村 毅
中島健蔵 森戸辰男 (五十音順)

旺文社文庫

死者の時 他一編

定価はカバーに表示してあります



昭和49年12月15日	初版印刷
昭和49年12月25日	初版発行
著者	井上光晴
発行者	根本峰好
印刷所	株式会社文弘社

発行所

株式会社 旺文社

162 東京都新宿区横寺町
電話 東京 (03) 267-1111〔代〕

0193/611-49/0724

910037

© 旺文社 1974

(許可なしに転載、複製することを禁じます)

Printed in Japan

落丁・乱丁・不良本はお取り替えします
本社に直接お申し出ください

(中村印刷・穴口製本)

旺文社文庫

死者の時

(他) 双頭の鷲

井上光晴著

旺文社

目次

死者の時

五

双頭の鷲

二七

解説

橋川 はしかわ
文三 ぶんそう

三〇七

代表作品解題

三二四

参考文献

三二九

年譜

三三〇

挿画 山野辺 進

死者の時

1

そう苦しくはなかった、という低い波のようにうねる声がふたたび彼女の胸をとらえた。いや全然苦しくなかった、一度波の下にぐっぐっとひっぱりこまれたが、また浮かび上り、その時腰の帯剣を取りはずして捨てた、という声がふたたび波のようにきこえてきた。明子元氣か、子供は元氣か、お前たちが病氣になると死ぬにも死にきれんからなあ、といういつもの良人おとこの声が急に途絶え、それからしばらく経たってその波のような声がきこえてきたのである。銃は輸送船の中においてきたが、帯剣のまま眠っていたので、それまで取りはずす暇がなかった、暇がないというより魚雷攻撃をうけてから船が沈むまで、あつという間のできごとだったので……できごとだったのでどうしたのどうしたの、と彼女は体を固くした。途切れた声はすぐ、それから腰が重くなった、と低い波のようにつづいた。帯剣を捨てたけれど、きつとどこかやられていたのかもしれないね、だんだんと腰と肩のつけ根のところが波にひきずられるように重くなったよ。波がふつと良人の声になり、また暗い海の中に流れた。班長だとか天皇陛下万歳だとかいう声があちらこちらにきこえた。船があつという間に沈んだから、兵隊は皆どこかやられていたんだ。しかし苦しくなかったよ、明子、それからまただんだん波が重くなっておれはお前のことを考えはじめた。お前を抱きながら死ぬのだなと思った。明子、ちっとも苦しくなかなかったよ、苦しくなかなかった、果しはてのない海の彼方かなたから地を匍はう風のように途切れ途切れにきこえてくる良人の声はそこで消えた。ソロモン

の海^いの向うからきこえてくる良人、原洋一の声はそこで終り、「苦しまずにね」とじっとりと額にうかぶ汗を掌で拭^{ぬぐ}いながら明子は思った。黒い幕だけがぼんやり判別できる電灯のつかぬ部屋の中に、ちょうど良人が死んだソロモンの海のようなゆたゆたしたものが流れ、その流れに熱っぽい身をまかせて、彼女はついさっききいた死ぬ瞬間の良人の声と顔をはっきり体の中でとらえようとした。「お前を抱きながら死ぬのだと思った」という声の調子が少し簡単すぎるようで不満だったが、「苦しまずに死んだのならよかったね」とふたたび心の中で呟^{つぶや}いた。佐世保駅の広場で挨拶^{あいさつ}する良人の顔がまたゆたゆたと彼女の閉じた瞼^{まぶた}の中にあらわれ、彼女はそれを押しつぶした。彼女はあのゆがんだように緊張した良人の顔を考えるのが苦痛であったのである。彼はまだ召集令状のこない前、「おれにもくるかなあ、くるかもしれないね、そんなときは大丈夫かなあ、おれは大丈夫だが、お前は大丈夫かなあ」といいながら彼女の頭を自分の腕の中に入れた。明子はその時の良人の顔を感じだしたかったのである。しかしなぜか見送りの町内会の人々に挨拶するその時の良人の表情しかはっきりつかむことができない。なぜかそのゆがみ緊張した赤禰^{あかだすき}の顔だけが鮮かに浮かび、「皆さん、ありがとうございます。ありがとうございます。では元気で征^{せい}ってまいります」というききたくない声がよみがえってくる。彼女は佐世保駅での顔と声をふり払うようにして立上り、襖^{ふすま}をあけ二階の階段につづいている廊下を逆の方に歩いて玄関わきの六畳間にでた。

「どうでした」いつもズボンふうに作った新しいモンペをはいている南沢伸子がきいた。

「ええ、死ぬ時のことが」原明子はその方にちょっと微笑を返しながらいった。壁際に坐っている

る、明子のみしらぬ女が何かぎくつとした眼をして彼女をみ、それから黙って頭を下げた。

「古田レイ子さんといわれるんよ、初めて、今日私がおつれしてね……」伸子はその若い女を明子に紹介し、それからつづけて、「戦死された時の様子がわかったんですか、よかったですね」といった。

「ええ」明子はいった。

「私はもう十回以上、毎週かかさずにきてるけど、まだ戦死のところはなかなかでてくれませんか。あなたは運がいいんですねえ」南沢伸子は膿うみんだような声でいった。

「輸送船があつというまに沈んで、それで……」原明子はいった。「ちっとも苦しくなかったといつてました」とつづけようとしたが黙っていた。

「去年ですか」南沢伸子はきいた。

「いえ一昨年です。昭和十八年の暮です。ソロモンでした」原明子は少し顫ふるえる声でこたえた。

「ソロモンだとニューギニアに近いですね」古田レイ子は言葉の先を重い槌つちで圧おさしつぶしたような声でいった。

「古田さんはね、婚約者の方が出征されて、もう一年も音信不通ですって」伸子が横から説明し「ニューギニアにいつてるんですけれど」と古田レイ子がまた自分の声をおしだした。

「そうですか、でも音信不通ならまだ……」と原明子はいった。

「そうですよ、そういう例はいくらでもあるんだから、一年位手紙がこなくても心配いらないうつて、そうさっきもいったんですけれどね」ついさっきの「もう一年も音信不通ですって」という調子

を全部裏返したようなはずみをつけて南沢伸子はいったが、古田レイ子はそれにこたえず、原明子のふせた眼を自分の視線ですくい起すように「でもね、それまではずっと手紙がきたんです。そういう約束でした。ニューギニアでも何でももし生きているなら、必ず何か便りがあると思うんですけど……」といった。

その時廊下で足音がして、この家の主人である戸部宗輔が瘦せた長身をあらわし、まるで待合室のをぞく医者のようなしぐさで「南沢さん、どうぞ」とうながした。

「あ、先生、今晚は。……この方です、この前お話しした方ですが、私はあとでよろしいですか」南沢伸子は横に坐っている古田レイ子の方をちょっとふりむいた。

「戸部です、手紙か写真か持ってこられましたか」合背広を折襟おりえりに仕立てた服を着た戸部宗輔はいつも初めての人間にはそうする眩まよしそうな眼つきで古田レイ子の方をみた。

「ええ写真だけ。南沢さんからききましたから」古田レイ子はいって風呂敷包みの中から写真をとりました。

「手紙もあるといいんですけどね」戸部宗輔はその写真を受取り、「ほう学生さんですか、どここの学校ですか」といった。

「いえ、学校は長崎高商ですが、もう卒業して福岡の倉庫会社につとめていました。体が弱くて検査は第二乙種だったんですが、とられて……」古田レイ子はこたえた。

「何歳ですか」戸部宗輔は防空被いおほのついた電灯の下にその写真の顔を確かめるようにもっていきながらいった。

「もし生きていたら、いま二十七歳です。こんどの戦争がはじまった翌年すぐ応召したんです」
古田レイ子はいった。

「南沢さんから大体事情はきいていますが、戦死されていなかったら何も霊はでませんよ」

「ええ、それでいいんです、戦死かどうかはつきりわかればそれでいいんです」

「いや、戦死されている場合でも、でないことがありますから、でないからといってはつきり生きておられるとはいえませんが」戸部宗輔は古田レイ子の視線をおしもどしていった。

「いいんです、お願いします」古田レイ子はじめて顔をふせた。

「じゃきて下さい、向うの書斎でもう少しお話をうかがいましょう」戸部宗輔は先に廊下の方に
出ようとし、それからふり返って「原さん、お子さんはもうすっかりいいんですか」と声をかけた。

「はあ、おかげさまで、昨日から学校に」原明子はこたえた。

「お嬢さんが御病氣かなにか」戸部宗輔と古田レイ子が霊媒部屋の向いにある書斎に去ったあと、
南沢伸子はきいた。

「ええ、扁桃腺になったんですが、ここの先生に頼んで海仁会の病院ですっかり治療してもらっ
て……おかげでたすかりました」原明子はこたえた。

「本当にここの先生にたのめばいいですね、病院の事務ではもうずっと古いのですからね、お医
者さんなんか手をつくすだけつくしてくれますよね」南沢伸子は少し見当はずれの、そして意外に
重くきこえる相槌をうった。

「ええ親切にしていただいて」と曖昧にこたえながら原明子は「どこかやられていたのかもしれ

んね、といったがどこを負傷していたのだろうか、もし負傷さえしなかったら助かっていたかもしれない」とさっきのつづきを考えはじめた。

「何歳ですか」本箱を背にした戸部宗輔は、古田レイ子が椅子に腰をかけるとすぐ聞いた。そして古田レイ子がさっきもこたえたはずだがと、とまどうように眼を上げるのにかぶせて「いえ、あなただけです、おいくつですか」といった。

「二十三です」被いをかけた机の上の電気スタンドの鈍い光線の輪をみつめて古田レイ子はこたえた。

「婚約者だとかききましたが」戸部宗輔が電気スタンドの被いを手で少し広くなおしながらいった。

「はあ」古田レイ子はこたえた。

「婚約はいつ、応召される前ですか」戸部宗輔はいった。

「ええ、応召する前でした、福岡で……」古田レイ子はいった。瞬間何か自分自身をうちのめすような衝動が起り、それに逆うように「戦争がはじまるとすぐでした」とつづけた。

彼女はその夜のことを考えはじめると、いつも体のある部分に何かとり返しのかぬ傷でもうけたように顫えるのである。その日、口実を作って土曜の午後到着する列車で長崎から会いにいった彼女を博多駅に出迎えて水谷彰はいきなり「おれたち結婚できるといいね」とそれまで思っていたような調子でいったのだ。「えっ」と古田レイ子がきき返したとき、姪ノ浜行の電車が折返し線路に入ってきたので、その言葉はそれきりになり、「よくこられたな」「この頃何よんでいる」「今

夜の夜行でかえるんだね、そうするといま二時半だから、三時半、四時半、五時半、六時半、七時半、八時半、九時半、十時半、十一時半、十二時半、汽車は一時だからちようど七時間一緒におれるな」というようなことをやつぎ早にいった。それから二人だけの時間をむさぼるように喫茶店、映画、鮫料理を専門に闇で酒をのませる中洲の料理屋、やはり二時間位しか店を出さぬ焼鳥の屋台というふうに歩きまわり、だんだんと残り少なくなっていく時間を逆にもてあつかいかねて、夜の九時すぎふたたびほんもののコーヒーをのませる因幡町の喫茶店に腰をおろしたとき、昼間博多駅頭でいった言葉をそのままつづけるように、「戦争はどうなるかな、戦争がひどくなるとても結婚できないかもしれんね」といったのである。「なぜ、兵隊にいくから」古田レイ子はきいた。「うん、とられるだろうなあ、どんどんとられているからねえ」水谷彰はこたえた。「大変ねえ」彼女はいった。「お父さんたちは元気」彼はいった。「ええ元気よ、母さんはずーっと風邪ひいていたけど」彼女はいった。「大変だなあ」彼はいった。何か言葉だけが空廻りしているようにそれが彼女にきこえた。

「前からお知り合いだったんですか」戸部宗輔は古田レイ子のやや前につきでた特徴のある唇くちびるのあたりをみていった。

「えっ」少し慌てたように古田レイ子は視線をもどし「ええ、学生るとき、うちに下宿していて、それで」と口ごもった。

「それで、手紙がこなくなったのはいつからですか」前の言葉と余り関連のないかけ離れた質問をしながら戸部宗輔は「この女は男をしらないまま年をとってしまうような顔をしているな」と感

じていた。

「もう一年以上、最後にきた手紙が去年の正月すぎてすぐですから、もう一年と五か月位になります」古田レイ子はいった。

「本当に男をしないのかもしれないな」という思いと、なにか急にそのことをきいてみたい気持ちが浮んでくるのに抗して、戸部宗輔は、「じゃ一度やってみますか、でられるかどうかわかりませんが、ともかく一度やってみますか、生きておられるなら絶対にませんから」といって立上った。

「お願いします」古田レイ子はいった。

「そうそう、あなたのお仕事をきくのを忘れていた」本箱の冷たい硝子ガラスに額の広い顔をおしつけるようにして戸部宗輔はきいた。

「県庁につとめていましたが、今年の三月からこちらの工廠の方にでています。いま部屋を借りているところが南沢さんの近くなので……」古田レイ子はこたえた。

「うまくでるといいですがね、僕の霊媒は少し方法がちがうんで、出来不出来が激しくってね」戸部宗輔は何かひどく空虚な気持ちになって弁解がましくいった。なぜかこの女は本当は何も信じてはいないんだという思いがさっきから鋭く幾度も彼の心をつきさし、どうしようもない哀れな気分に襲われつづけていたのである。そしてその哀れな気分はもしかしたら女がそうであるからではなく自分の方がそうなのかもしれぬという思いと重なり、戸部宗輔はまた「霊はむしろあなたの心に宿るんですよ、それが本当なんです。私はただ手助けするだけです」と、ややかん高くなった声でいった。

「ええ」古田レイ子はこたえた。その時、音もなく扉があいて薄暗い部屋の光りの中でもはっきりわかるほどひどく顔色のわるい青年が入ってきて、古田レイ子を見ると、「あ」という表情をした。

「何だ」戸部宗輔はふりむいた。

「本をとうろと思つて」青年はいった。

「息子です」戸部宗輔は古田レイ子にいった。青年は黙って彼女に頭を下げた。自分の目的とした本ではなく、一番手近な本を持って早くその部屋をでたいという明らかにそれとわかるしぐさで青年が去った後、戸部宗輔がまた古田レイ子に弁解するように「佐賀の高等学校にはいつてるんですが、体をこわしましてね、この春からずっとうちにいるんです」といった。

「大変ですね」古田レイ子はいった。

戸部宗輔の胸をふたたびむなしい穴のあいた風のようなものが叩きはじめ、彼は自信のない声で「それではむこうの部屋にいきましょるか、その婚約者の方を黙って考えておかれるといいのです。もう少しまくいけば霊がみえてきますから」といった。

襖をあけた戸部宗輔の手をくぐるようにして、古田レイ子は先にその電灯のついていない暗い聲の部屋に坐り、その後から戸部宗輔が入って垂れ下っている黒い幕の向う側に消えた。

「いいですか、心を集中していて下さい。もし私が声を出しても何もいわないで黙っていて下さい、あなたが声を出したら一度に何もかも消えてしまいますからね」黒い幕のかげからきこえてくる戸部宗輔の声は少し変っていた。